3章

【添削課題】

出典…信州大学・医学部・12年

解答

【文章例①（コンビニ受診はあるべき姿ではない、とする立場から）】

コンビニ受診はあるべき医療の姿ではないと思う。いつでも医療機関を利用できるコンビニ受診を認める立場は、患者には専門知識がなく、自分で判断できない存在であるという前提で成り立つものである。しかし、インフォームド・コンセントに代表されるように、現代の医療では患者自身が自分の病気に対する責任の一端を担うことが前提となっている。コンビニ受診には、そういった患者側の責任を放棄した態度が感じられてならない。

患者が主体となる現代医療では、市民一人ひとりが、医療資源が限られたものであることを知り、国民皆保険制度を維持していくための方法を考えていく必要がある。とすれば、例えば軽い風邪にも関わらず日中は自分の用事を優先し、夜間の救急窓口を利用するコンビニ受診は、緊急搬送に備えて待機する医師を疲弊させる、身勝手な行為であることに気付くはずだ。

もちろん、医師側も、患者の不安に対応する電話相談や、緊急性の高い患者に対する医療行為が医療資源の無駄ではないことを理解するべきである。そして、患者が責任主体になれるように、適切な医療資源の利用法を、医療者側が地域の住民に広く理解できるよう働きかけていく必要がある。患者側、医療者側双方が、社会の医療のあり方に積極的に関与して考えていくことが、コンビニ受診という形式に止まることのない、現代のあるべき医療システムを構築していくために不可欠なのである。

【文章例②（コンビニ受診はあるべき姿である、とする立場から）】

コンビニ受診はあるべき姿だと思う。患者は医学的な専門知識のない素人であり、心身の変調がそのまま見過ごしてよいものかの判

断は下せない。二四時間受診できる救急窓口があるからこそ、私たちは安心して暮らすことができている。国民皆保険制度は、そのような医療資源の利用を国民に保障するものであると考える。誰もが本当に困ったときにコンビニ受診を利用することは、医療保険を負担している患者の当然の権利であると思う。

しかし、医療従事者の立場から言えば、風邪など緊急を要しない患者が、コンビニ受診をしたり救急車を利用したりすることで医療制度は破綻しかかっており、個々の医師の超人的な献身でかろうじて維持している窮状は改善してほしいと思う。医師も普通の人間であり、医療システムにも限界はあるはずなのだ。現行の医療資源の枠内では、患者が求めるようなコンビニ受診を維持するのは難しいといわざるを得ない。

では、どうすればいいのか。医療資源の賢い活用について、医療従事者と患者側がもっと意見交換を行うことが不可欠であると思う。病診連携も、患者の理解なしにはシステムとして稼働しない。教育機関や保健所、町内会など地域住民と医療従事者が連携し、地域の医療が抱えている問題を共有し、安心で低価格な医療資源を利用し供給し続けるためにはどうしたらいいのかを、共に考えていくべき時代になっていると考える。

解説

1　出題のねらい

「患者が少しの病気でも不安になり、医療施設に昼夜問わず訪れる」という「コンビニ受診」という医療の実情、形態について述べられた文章を読み、その是非について考える問題。このように具体的な医療問題の是非について論じる問題は、医学部小論文で頻出である。このような出題の場合、テーマとなっている事柄について、事前にどの程度の知識を有しているのかが論述に大きく影響するし、出題側も受験者の日頃からの医療への関心を確認したい、という意図がある。ニュースなどを通じて、医療に関して話題となっている事柄については意識的に情報収集をするようにして、理解を深めていこう。

また、今回の出題は「医療者側の立場」と「患者の立場」双方を踏まえて「コンビニ受診の是非」について自分の意見を論じる、ディベート型の出題である。どちらの立場をとるのかが評価に影響することはないが、「どちらとも言えない」という中立の立場を取ることや、一方の立場から、もう一方を批判するだけの論述ではよい評価は得られない。賛否ディベート型の出題における基本的な論述の

仕方についても、この課題から学んでほしい。

2　設問要求

課題文の内容を理解した上で、以下の問に答える。

現代医療において「コンビニ受診はあるべき姿」かどうか、について
・医学生や医師を目指す立場
・患者の立場
の双方を踏まえて、あなた自身の考えを六〇〇字以内で論述する。

ここで大切なのは、「コンビニ受診」という現象を、医療を提供する側（医療従事者を目指す側）からの視点と、患者という医療を受ける側双方の視点から考えなければいけない点である。そのため、「**1　出題のねらい**」でも述べたが、患者の視点から「医療はサービス業で患者は顧客なので当然受診できるようにするべきだ」とか、医療従事者や学生の立場から、「医師には専門もあり、病院と診療所は担当している疾病が異なり、救急は限定された利用にとどめるべきだ」というような、一方的な考察では、設問要求を満たしていないことになる。この出題では、双方の視点から検討することによって、日本の医療が今どのような状況に置かれているのか、どうしていけばいいのかなど自分なりのビジョンを示せるかどうかが問われている。その意味では、「コンビニ受診」の是非を越えた「患者の医療機関へのアクセスのあるべき姿」を見据えて論述を検討する必要があり、簡単そうに見えて奥の深い設問になっている。六〇〇字という制限字数内ですべてを語りつくすのは難しい課題だが、慎重に検討して自分なりの考えをまとめてほしい。

3　課題文の読解

①　テーマの提示（第一段落）

・「患者さんが少しのことでも不安になり、医療施設に昼夜を問わずちょこちょこやってくる」という「コンビニ受診」が、「医師不足なのに、限りある医療資源を逼迫している」という観点から問題になっている。

② 筆者の意見と論拠の提示（第二～四段落）

・「コンビニ受診」が実現できれば、それに越したことはない。

←なぜなら

・病気や具合が悪くなることは、いつ自分の身におきるのかわからないのだから、病院が二四時間営業してもらわないと困る、というのは当然の市民の感覚である。

・今、社会問題化しているコンビニ受診は、患者がうまく医療へアクセスできない混乱の表れである。

→医療者側からすれば、「何でこれくらいのことで……」と思うことでも、患者にとってはどうしてそれがいけないのかさっぱりわからないものであり、それを「コンビニ受診はダメ！」と怒るのは気の毒である。

③ 問題点の検証（第五～七段落）

・この問題は、医師アタマ的な発想で医療の構造を設計してきた今までの医療システムの弊害である。

←

・医療提供者は、専門分化を極め、その領域における最新で最高の医療知識と技術のあることが最高の医療であり、その守備範囲にある患者に常に正しい答えを提供しなければならない、という強迫観念から逃れられなかった。しかし、この構造で医療を行うスタイルは、救急現場を中心に破綻してきている。

←

・そこで医師たちは「医療は常に不確実で、医療の成果にも限界はある」という言葉を口にしたが、それは当たり前のことであり、（筆者には）この言葉自体が、医療者が自分たち自身に向けて発している、気づきのメッセージに聞こえる。

④ 解決案の提案（第八～十一段落）

・市民にとって本当に役に立つコンビニ受診を可能にするためには、地域や行政を含めて、地域にある医療資源をバランスよく使うことを考えていかなければならない。
・医療行為には、そのときにやらなければならないことから一ヶ月待てることまであり、その多くは専門家（医療従事者）にしかわからない。
・明日まで待てることについては、十分に時間と余裕がある状態で行う方が、医療を受ける側にとってもよい結果が得られるはずである。
・患者の立場ですぐにできることは、まずできるだけ病院の営業時間内に行ったり問い合わせをすることであり、それだけでも医療施設の動線は整えられ、変わっていくはずである。
・夜、急に具合が悪くなった場合は、躊躇せずに医療機関に問い合わせ、受診するほうがよい。
・ただし、そこで行われる医療は応急処置であることを知っておく必要があり、応急処置のみであることが、医療提供側の余裕を生み、本当に医療が必要なときにかかることのできる地域社会を育む、最良の医療なのではないか。

以上、課題文の内容を細かく見てきた。ポイントを整理してみると、

- 課題文の立場は、（医療者側がよく述べるように）「コンビニ受診」をダメと決めつけてはいない
- コンビニ受診の背景には、患者が「うまく医療へアクセスできない混乱の表れ」がある
- 医師たちの言う「医療は常に不確実で、医療の成果にも限界はある」という言葉は、医師自身に向けられた一種の気づきのメッセージである
- この問題では、「地域にある医療資源をどうバランスよく使っていくか」が問われている

となるだろう。これらの論点を踏まえて、答案作成へ構想を練っていってほしい。

4　答案作成へのアプローチ

① **「医学生や医師を目指す立場」と「患者の立場」を検討する。**

設問要求では

・医学生や医師を目指す立場＝医療に従事する側としての立場

・患者の立場＝医療を受ける側の立場

の双方を踏まえて自分の意見を作成することが求められている。まずは、課題文の内容を参考に、それぞれの立場から「コンビニ受診」という問題について検討してみよう。

〈医学生や医師を目指す立場〉

・課題文で取り上げられている「コンビニ受診」をする患者は、「急に血圧が高くなって」などと不安に駆られた場合の受診であり、患者の側も善意である。一方で、「平日の昼間は仕事に行きたいので、あえて夜間の救急医療を利用する」といった、「確信犯」の患者もおり、無用に医療資源を圧迫していることは間違いない。

・風邪や軽度の疾患でも大病院の専門医を訪れる患者が増えすぎると、一人の患者にかけられる時間が減り、十分な医療サービスを提供することは出来なくなる。その結果、本当に医療が必要な人に対して適切な処置ができるとも言いがたい。

・本来事故など緊急の患者を診察するために待機している夜間の救急医療の現場が、風邪にも関わらず夜間の救急窓口を受診する患者の対応で疲弊している。

・インフォームド・コンセントに代表されるように、現在は患者が自分の病気に対して責任主体になることが求められている。そのような時代に、「不安だから」という理由でいつでもどこでも無責任に医療資源を利用するのは、患者側の甘えではないか。

・人的負担においても財政面においても、コンビニ受診を維持していくのは難しい。

〈患者の立場〉

・医療に素人である患者の側からしてみれば、ちょっとした身体の不調であっても不安になることは当然である。それを「患者の甘え」と切り捨てることは、医療者側の傲慢であり、また大疾患の前兆を見落とすことにもつながるのではないか。

・核家族化や地域コミュニティの崩壊によって、近くに相談できる人がいなくなっている。そのため、直接医療機関に問い合わせ

るというのは自然な流れである。

・高齢者だけの世帯も増えているため、体の具合が悪くなったときに、家族では対処できず医療機関を利用するというケースが増えているのではないか。

・患者が責任主体になるべきだといっても、どのように医療資源を活用するのがよいかわからない。そのような周知は医療者側の義務であり、それを怠ったままでコンビニ受診を否定するのは問題ではないか。

他にもさまざまな論点があり、それぞれの論点のどこに重点を置くかで、「コンビニ受診」に対する立場も変わるだろう。しかし、最終的に賛成／反対どちらの立場をとるにせよ、医療従事者側と患者側がコミュニケーションをとることによって、よりよい医療資源の利用の仕方について相互理解を行うことの必要性については触れておきたい。社会保障費の激増の中で、国民皆保険制度をどのように維持するのかという大きな問題が、この問題の背景にあることへの理解を示そう。

②「コンビニ受診」の是非について、自分の立場を決め、その論拠を提示する。

最後に、先に検討した内容を踏まえて、自分が「コンビニ受診」の是非についてどのような立場をとるのかを決め、その論拠を提示していく。ただし、コンビニ受診を否定する場合は、その代替としてどのようなことを医療者側がするべきなのかについて言及したい。逆にコンビニ受診を肯定する場合も、コンビニ受診が現在の医療資源を逼迫していることを踏まえて、コンビニ受診を含めた医療システムのあり方とそのために必要なことについて言及したい。

「解答」の**【文章例①】**は、コンビニ受診を否定する立場から論じたもの。コンビニ受診について、患者側の甘えを指摘するとともに、医師側の疲弊を述べ、両者の建設的な歩み寄りについて論じている。課題文はコンビニ受診に肯定的な論調のため、コンビニ受診に否定的な答案は作りにくく感じるかもしれないが、コンビニ受診によって医療資源が圧迫されていることは事実であり、それを論拠に自分の立場を主張していきたい。

【文章例②】は、コンビニ受診を肯定する立場で、国民健康保険制度の保険料を支払っている患者には、不安になったときに医療機関を利用する権利がある、と患者側の権利をあげている。一方で、医療システムの維持の難しさを論じ、医療従事者と患者側がコミュニケーションをとる中で、限りある医療資源をどう活用していくか、問題を共有できるような場を持つことが不可欠であ

ることと提言し、医療資源の有効利用について言及している。この立場を取る場合、基本的には課題文に沿った論述になるだろう。気を付けたいのは、課題文と同じ内容のものを書いているだけで、自分のオリジナルな考察が全く見当たらないタイプの答案にならないようにしなくてはならないことだ。

以上、コンビニ受診はあるべき姿かについて、賛否両面から小論文を書く上での注意を述べてきたが、従来の医師―患者の関係論には、病院―地域といった社会の中に両者が存在しているという視点が不足しがちであると感じる。個別の医師、個別の患者というだけではなく、日本という国の医療システムの中にある病院、その病院で働く医師という立場、また病院は地域に存在し、利用者である患者もまた地域コミュニティの一員であるという視点を持つ必要があるということだ。公共の医療機関であれ、保険診療を行っている民間の病院であれ、医療制度の円滑な運用がなければ存続し得ない。患者側も、健康保険料を支払い、また地域の中の病院を主体的に選択する立場であることを免れない。病院の中で、患者は社会的存在ではなく病気を患っている弱者であるという視点は忘れてはならないが、患者もまた医療を受ける主体であるという論点も重要なのではないか。

インフォームド・コンセントの先には何があるのか、医療の社会化の中で、私たちは何を問わなければならないのか、この小論文を書き上げることで、自分なりに考察して欲しい。